

二〇一七年四月二二日（土）

於 京都大学 総合研究二号館

担当 桐原 孝見

【原文】

真人問、「何以知道效乎。」

神人曰、「決之於明師<sup>\*1</sup>、行之於身、身變形易、與神道<sup>\*2</sup>同門<sup>\*3</sup>、與眞<sup>\*4</sup>爲隣<sup>\*5</sup>、與神人同戸。求之子身、何不覩。患其失道意<sup>\*6</sup>、反求之四野<sup>\*7</sup>、索之不得、便至窮老<sup>\*8</sup>矣。遂離其根<sup>\*9</sup>、言天下無道<sup>\*10</sup>也、常獨愁苦<sup>\*11</sup>。離其根、是爲大災。大人<sup>\*12</sup>失之不能平<sup>\*13</sup>其治、中士<sup>\*14</sup>失之亂其君、仁人<sup>\*15</sup>失之無從爲賢、小人失之滅其身。古之賢聖<sup>\*16</sup>所行、與今同耳。古之小人所窮、亦與今同耳、明證<sup>\*17</sup>若此。」

真人問、「何以知人將興將衰乎。」

神人言、「大人將興、奇文<sup>\*18</sup>出、賢者<sup>\*19</sup>助之爲治。家人將興、求者得生<sup>\*20</sup>、其子善可知矣。」

【訓】

真人問う、「何を以て道效を知るか。」と。

神人曰わく、「之れを明師より決し、之れを身より行えば、身變じ形易わり、神道とは門を同じくし、眞とは隣を爲し、神人とは戸を同じくす。之れを子の身に求めて、何ぞ覩ざる。患えば其れ道意を失い、反つて求めて四野に之くも、之れを求めて得ざれば、便ち窮老に至る。遂に其の根を離れては、天下に道無きを言い、常に獨り愁苦す。其の根を離れるは、是れ大災（Ⅱ災）爲り。大人は之れを失するや其の治を平らかにすること能わず、中士は之れを失するや其の君を亂し、仁人は之れを失するや從る無くして賢と爲り、小人は之れを失するや其の身を滅ぼす。古の賢聖の行う所は、今と同じ。古の小人の窮まる所は、亦た今と同じくして、明證此の若し。」と。

真人問う、「何を以て人の將に興らんとし將に衰えんとするを知るか。」と。

神人言う、「大人の將に興らんとするや、奇文出で、賢者之れを助けて治を爲す。家人の將に興らんとするや、求める者生を得、其れ子は善く知る可きなり。」と。

【訳】

真人は「どうして道の効験がわかるのですか。」と尋ねた。

神人は「すぐれた師から道の効験が決定され、自身から道の効験が実行されると、肉体が変化し、万物の実際のありさまとは根源を同じくし、眞実とは隣りあい、神人とは異なります。あなた自身が道の効験を探求していて、どうして気付かないのでしょうか。病気になる道と道の奥深い意味を喪失しますし、反対にあちらこちらを探求して移動しても、道の奥深い意味が見出せなければ、すぐに年老いてしまいます。かくて根基から遠ざかつては、天下に道が行われないと公言して、いつもひとりで思い悩みます。根基から遠ざか

ることは、大きな災難なのです。大人は根基を喪失すると政治を太平にすることができず、中士は根基を喪失すると君主を混乱させ、仁人は根基を喪失すると手順をふまずに賢人となり、小人は根基を喪失すると死んでしまいます。昔の賢人聖人が行ったことは、今と同じです。昔の小人が苦しんだことは、今もまた同じであって、はっきりとした証拠はここに示した通りです。」と言った。

真人は「どうして人が興隆しそうなことや衰微しそうなことがわかるのですか。」と尋ねた。

神人は「大人が興隆しそうであるときは、素晴らしい文章があらわれ、賢者が大人の政治を補佐します。一族が興隆しそうであるときは、望む者が助かることを、あなたはじゅうぶん知っていますよ。」と言った。

#### \*1 明師

『抱朴子』内篇、勤求

夫人生先受精神於天地、後稟氣血於父母。然不得明師、告之以度世之道、則無由免死。鑿石有餘焰、年命已凋頽矣。由此論之、明師之恩、誠為過於天地、重於父母多矣。

夫れ人生先ず精神を天地より受け、後に氣血を父母より稟く。然も明師を得て、之れに告ぐるに世を度るの道を以てせずんば、則ち死を免るるに由無し。石を鑿ちて餘焰有るに、年命は已に凋頽す。此れに由りて之れを論ずれば、明師の恩、誠に天地より過ぎ、父母より重しと為すこと多し。

『太平經鈔』甲部・卷一

明師難遭、良時易過。(一葉表)

明師は遭い難く、良時は過ぎ易し。

『太平經鈔』乙部・卷二

學得明師事之、禍亂不得發也。(二五葉裏)

學ぶに明師を得て之れに事うれば、禍亂は發するを得ざるなり。

#### \*2 神道

『抱朴子』内篇、雜應

或問隱淪之道。抱朴子曰、「神道有五。坐在立亡其數焉。然無益於年命之事。但在人間無故而為此、則致詭怪之聲。不足妄行也。…(後略)…」

或るもの隱淪の道を問う。抱朴子曰わく、「神道は五有り。坐すれば在り立てば亡きは其の數なり。然して年命の事に益無し。但だ人間に在りて故無くして此れを為せば、則ち詭怪の聲を致す。妄りに行うに足らざるなり。…(後略)…」と。

『太平經鈔』癸部・卷一〇（涵七四七、太平部 外下）  
所謂神道書者、本根與陰陽合、與神明同。（二葉裏）  
所謂神道の書なる者、本根は陰陽と合し、神明と同じ。

『周易』繫辭下

子曰、「乾坤其易之門邪。乾、陽物也。坤、陰物也。陰陽合德、而剛柔有體、以體天地之撰、以通神明之德。【孔穎達疏】「以通神明之德」者、萬物變化、或生或成、是神明之德。…（後略）…」

子曰わく、「乾坤は其れ易の門か。乾は、陽物なり。坤は、陰物なり。陰陽徳を合わせて、剛柔體有り、以て天地の撰を體し、以て神明の徳に通ず。【孔穎達疏】「以て神明の徳に通ず」とは、萬物變化し、或いは生じ或いは成る、是れ神明の徳なり。…（後略）…」と。

\*3 同門

『淮南子』人間訓

夫禍之來也、人自生之。福之來也、人自成之。禍與福同門、利與害為鄰、非神聖人、莫之能分。

夫れ禍の來るは、人自ら之れを生ず。福の來るは、人自ら之れを成す。禍と福とは門を同じくし、利と害とは鄰を為す、神聖の人に非ざれば、之れを能く分かつこと莫し。

\*4 眞

『太平經鈔』乙部・卷二

是故思神致神、思眞致眞、思仙致仙、思道致道、思智致智。（一四葉裏）

是れ故に神を思い神を致す、眞を思い眞を致す、仙を思い仙を致す、道を思い道を致す、智を思い智を致す。

\*5 爲隣

『孟子』滕文公下

萬章問曰、「宋、小國也。今將行王政。齊楚惡而伐之、則如之何。」孟子曰、「湯居亳、與葛為鄰、葛伯放而不祀。…（後略）…」

萬章問いて曰わく、「宋は、小國なり。今將に王政を行わんとす。齊楚惡みて之れを伐たば、則ち如之何せん。」と。孟子曰わく、「湯、亳に居り、葛と鄰を為す、葛伯放にして祀らず。…（後略）…」と。

\*6 道意

『抱朴子』内篇、塞難

或曰、「仲尼稱自古皆有死、老子曰神仙之可學。夫聖人之言、信而有徵、道家所說、誕而難用。」抱朴子曰、「仲尼、儒者之聖也、老子、得道之聖也。儒教近而易見、故宗之者衆焉。

道意遠而難識、故達之者寡焉。道者、萬殊之源也。儒者、大淳之流也。…(後略)…」

或るひと曰わく、「仲尼稱す古自り皆死有り」と(『論語』顔淵)、老子曰わく神仙は學ぶ可しと。夫れ聖人の言は、信にして微有るも、道家の所説は、誕りにして用い難し。」と。抱朴子曰わく、「仲尼は、儒者の聖にして、老子は、得道の聖なり。儒教は近くして見易し、故に之れを宗ぶ者衆し。道意は遠くして識り難し、故に之れに達する者寡なし。道なる者は、萬殊の源なり。儒なる者は、大淳の流なり。…(後略)…」と。

『太平經鈔』乙部・卷二

夫人失道、命即絕。審知道意、命可活。(一五葉裏)

夫れ人は道を失わば、命は即ち絶ゆ。審らかに道意を知らば、命は可ち活く。

#### \*7 四野

『後漢書』馬融列傳第五〇上

元初二年(一一五)、上「廣成頌」以諷諫。其辭曰、…(前略)…然後舉天網、頓八紘、擊斂九藪之動物、纒藁四野之飛征、鳩之乎茲囿之中。…(後略)…(一九五九頁)

【顏師古注】摯、聚也、音子由反。…(中略)…動物、謂禽獸也。…(中略)…『說文』曰、「纒、落也。」…(中略)…賈逵注云、「纒、還也。」藁、囊也、音託。四野、四方之野。飛征、飛走也。鳩、聚也。

元初二年(一一五)、「廣成頌」を上りて以て諷諫す。其の辭に曰わく、…(前略)…然る後に天網を擧げ、八紘を頓え、九藪の動物を摯斂し、四野の飛征を纒藁し、之れを茲の囿の中に鳩む。…(後略)…

【顏師古注】摯は、聚なり、音は子由の反なり。…(中略)…動物は、禽獸を謂うなり。…(中略)…『說文』に曰わく、「纒は、落なり。」…(中略)…賈逵の注に云わく、「纒は、還なり。」藁は、囊なり、音は託なり。四野は、四方の野なり。飛征は、飛走なり。鳩は、聚なり。

#### \*8 窮老

『文選』卷二八、鮑照「樂府」八首「東武吟」

少壯辭家去、窮老還入門。

【李善注】『漢書』婁護曰、「呂公窮老、託身於我。」

少壯家を辭して去り、窮老還りて門に入る。

【李善注】『漢書』に、婁護曰わく、「呂公窮老し、身を我に託す。」と。

『漢書』卷九二、游俠傳第六二 樓護

及(樓)護家居、妻子頗厭呂公。護聞之、流涕責其妻子曰、「呂公以故舊窮老託身於我、義所當奉。」遂養呂公終身。(三七〇八〜三七〇九頁)

(樓) 護の家居するに及び、妻子すこぶ頗る呂公を厭いとう。護之れを聞き、涕なみだを流し其の妻子を責めて曰わく、「呂公故舊こきゆうを以て窮老して身を我に託す、義として當まさに奉ずべき所なり。」と。遂に呂公を養い身を終う。

\*9 根、災(Ⅱ災)

『太平經鈔』乙部・卷二、「脩一卻邪」

天地開闢、貴本根乃氣之元也。欲致太平、念本根也。不思其根、名大煩。舉事不得、災並來也。此非人過也、失根基也。(二葉表)

天地開闢より、本根を貴ぶは乃ち氣の元なり。太平を致さんと欲し、本根を念うなり。其の根を思わざるを、大煩と名づく。事を舉げて得ざれば、災い並びに来るなり。此れ人の過ちに非ざるなり、根基を失うなり。

\*10 天下無道

『老子』四六章

天下有道、卻走馬以糞。天下無道、【河上公注】謂人主無道也。戎馬生於郊。罪莫大於可欲、禍莫大於不知足、咎莫大於欲得。故知足之足、常足矣。

天下に道有れば、走馬を卻けて以て糞す。天下に道無ければ、【河上公注】人主に道無きを謂うなり。戎馬郊に生ず。罪は欲す可きより大なるは莫く、禍は足るを知らざるより大なるは莫く、咎は得んことを欲するより大なるは莫し。故に足ることを知るの足るは、常に足れり。

\*11 愁苦

『楚辭』九歌、少司命

秋蘭兮麝蕪、羅生兮堂下。綠葉兮素枝、芳菲菲兮襲予。夫人自有兮美子、蓀何以兮愁苦。

【王逸注】蓀、謂司命也。【洪興祖注】此言愛其子者、人之常情、非司命所憂、猶恐不得其所。…(中略)…蓀亦喻君

秋蘭と麝蕪と、堂下に羅生すと。綠葉素枝、芳菲菲予を襲う。夫の人自ら美子有り、蓀何を以て愁苦す。【王逸注】蓀は、司命を謂うなり。【洪興祖注】此れ其の子を愛する者は、人の常情にして、司命の憂うる所に非ず、猶お其の所を得ざるを恐れるを言うなり。…(中略)…蓀は亦た君を喻うるなり。

『太平經鈔』乙部・卷二、「安樂王者法」

天地常欲使樂、不得愁苦。憐之如此、天地之心意、氣第一者也。故王者愁苦、四時五行氣乖錯、殺生無常也。(二〇葉裏)

天地は常に樂しみて、愁苦するを得ざらしめんと欲す。之れを憐れむこと此の如ければ、天地の心意は、氣の第一なる者なり。故に王者愁苦すれば、四時五行の氣乖錯し、殺生常無し。

\*12 大人、小人

『論語』季氏

孔子曰、「君子有三畏。畏天命、畏大人、【何晏集解】大人、即聖人、與天地合其德。畏聖人之言。小人不知天命而不畏也、狎大人、侮聖人之言。」

孔子曰わく、「君子に三畏有り。天命を畏れ、大人を畏れ、【何晏集解】大人は、即ち聖人にして、天地と其の徳を合す。聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る。」と。

\*13 不能平

『孟子』離婁上

孟子曰、「離婁之明、公輸子之巧、不以規矩、不能成方員。師曠之聰、不以六律、不能正五音。堯舜之道、不以仁政、不能平治天下。…（後略）…」

孟子曰わく、「離婁の明、公輸子の巧も、規矩を以いざれば、方員を成すこと能わず。師曠の聰も、六律を以いざれば、五音を正すこと能わず。堯舜の道も、仁政を以いざれば、天下を平治すること能わず。…（後略）…」と。

\*14 中士

『老子』四一章

上士聞道、勤而行之。中士聞道、若存若亡。下士聞道、大笑之。不笑不足以為道。

上士は道を聞けば、勤めて而して之れを行う。中士は道を聞けば、存するが若く亡するが若し。下士は道を聞けば、大いに之れを笑う。笑わざれば以て道と為すに足らず。

『太平經鈔』乙部・卷二

故上士為君、乃思神眞。中士為君、乃心通而多智。下士為君、無可能思、隨命可為。

（一四葉裏）

故に上士は君と為れば、乃ち神眞を思う。中士は君と為れば、乃ち心通して智多し。下士は君と為れば、能く思う可く無く、命に隨いて為す可し。

\*15 仁人

『論語』衛靈公

子曰、「志士仁人、【皇侃義疏】「志士仁人」者、謂心有善志之士、及能行仁之人也。無求生以害仁、有殺身以成仁。【何晏集解】孔（安國）曰、無求生以害仁、死而後成仁、則志士仁人不愛其身也。」

子曰わく、「志士仁人は、【皇侃義疏】「志士仁人」なる者は、心に善き志有るの士、及び能く仁を行うの人を謂うなり。生を求めて以て仁を害すること無く、身を殺して以て仁を成すこと有り。【何晏集解】孔（安國）曰わく、生を求めて以て仁を害すること無く、死して後に仁を成す、則ち志士仁人其の身を愛さざるなり。」と。

\*16 賢聖

『莊子』雜篇、天下

天下大亂、賢聖不明、道德不一。天下多得一、察焉以自好。

天下大いに亂れ、賢聖明らかならず、道德一ならず。天下多く一を得、察焉として以て自ら好しとす。

『太平經鈔』乙部・卷二、「錄身正神令人自知法」

是故賢聖明者、但學其身、不學他人、深思道意、故能太平也。君子得之以興、小人行之以傾。(二葉表)

是れ故に賢聖の明なる者は、但だ其の身を學び、他人に學ばず、深く道意を思うのみ、故に能く太平なり。君子は之れを得て以て興り、小人は之れを行いて傾く。

\*17 明證

『抱朴子』內篇、辨問

又『易』曰、「有聖人之道四焉、以言者尚其辭、以動者尚其變、以制器者尚其象、以卜筮者尚其占。」此則聖道可分之明證也。

又た『易』に曰わく、「聖人の道四有り、以て言う者は其の辭を尚び、以て動く者は其の變を尚び、以て器を制する者は其の象を尚び、以て卜筮する者は其の占を尚ぶ。」(『周易』繫辭上)と。此れ則ち聖道分かつ可きの明證なり。

\*18 奇文

『文心雕龍』卷一、辯騷

自風雅寢聲、莫或抽緒、奇文郁起、其離騷哉。

風雅、聲を寢みて自り、或いは緒を抽くこと莫く、奇文郁として起こる、其れ離騷なるかな。

\*19 賢者

『後漢書』獨行列傳第七一、李業

會王莽居攝、(李)業以病去官、杜門不應州郡之命。太守劉咸強召之、業乃載病詣門。

(劉)咸怒、出教曰、「賢者不避害、譬猶穀弩射市、薄命者先死。聞業名稱、故欲與之為治、而反託疾乎。」(二六六九頁)

王莽の居攝に會り、(李)業は病を以て官を去り、門を杜じて州郡の命に應ぜず。太守劉咸強いて之れを召すや、業は乃ち病を載せて門に詣る。(劉)咸怒り、教を出して曰わく、「賢者害を避けざれば、譬うれば猶お弩を穀きて市に射、薄命の者先ず死するがごとし。

業の名稱を聞き、故に之れと與に治を為さんと欲せしに、而るに反つて疾に託すか。」と。

『太平經鈔』乙部・卷二、「解承負訣」

凡人之行、或有力行善、反常得惡。或有力行惡、反得善。因自言為賢者、非也。

(一一葉表)

凡そ人の行い、或いは力めて善を行うも、反つて常に惡を得ること有り。或いは力めて惡を行うも、反つて善を得ること有り。因りて自ら言いて賢者と為すは、非なり。

\*20 家人

『詩經』國風、周南、桃夭

桃之夭夭、其葉蓁蓁。之子于歸、宜其家人。

【毛伝】一家之人盡以為宜。

【鄭玄箋】箋云、家人猶室家也。

桃の夭夭たる、其の葉蓁蓁たり。之の子于歸で、其の家人に宜しからん。

【毛伝】一家の人盡く以て宜しきを為すなり。

【鄭玄箋】箋に云わく、家人は猶お室家のごとし。

\*21 得生

『抱朴子』内篇、地真

白刃臨頸、思一得生。知一不難、難在於終。

白刃の頸に臨むとき、一を思えば生を得。一を知ること難からず、難きことは終に在り。